

令和 7 年度第 2 回三重県教育改革推進会議
議事概要

- 1 日 時 令和 8 年 1 月 28 日（水）10 時 00 分から 11 時 40 分まで
- 2 場 所 三重県総合教育センター 多目的ホール
- 3 出席者

三重県教育改革推進会議委員 11 名

小 林 慶太郎	会 長	松 浦 直 己	副会長
石 川 正 浩	委 員	井 上 珠 美	委 員
江 森 真矢子	委 員	貝ノ瀬	滋 委 員
川 北 睦 子	委 員	黒 田 喜 昭	委 員
本 多 雅 子	委 員	耳 塚 寛 明	委 員
山 田	忍 委 員		

（欠席：田中望委員、廣瀬琢也委員）

（事務局）

福永教育長、大屋副教育長、

福井次長兼総括市町教育支援・人事監、早田次長、坂井次長、小濱次長、
一尾教育政策課長、山北高校教育課長 ほか

4 配付資料

資料 1 三重県教育改革推進会議 委員名簿

資料 2 答申（部会案）

資料 2（別紙） 答申（部会案・概要）

資料 3 事務局説明資料

5 審議事項（これからの県立高等学校の活性化について）

令和 6 年度第 2 回三重県教育改革推進会議（令和 7 年 3 月 26 日）において
諮問された「次期県立高等学校活性化計画の策定に係る県立高等学校の学び
並びに規模及び配置の在り方」について、松浦副会長（県立高等学校の在り方
調査研究部会部会長）から資料 2に基づき答申（部会案）について、事務局か
ら資料 3に基づき補足説明があった後、委員間で議論が行われた。

委員間での議論の後、出された意見を踏まえた修正その他の答申に関する
事項は、小林会長に一任となった（異議なし）。

なお、出席委員から出された主な意見は次のとおり。

(石川委員)

- 私立高校の中には、先進的な取組をしているところもあり、学ぶところがある。
- 高校において地域性を考えることは難しいが、コミュニティ・スクールの仕組みなどを通じて、地域を巻き込んだ取組をすることは可能である。

(本多委員)

- 「地域コーディネーター」とあるが、高校における「地域」がどのようなものか、一般の方に分かりにくいのではないか。

(江森委員)

- 高校において、コミュニティ・スクールは地域コミュニティというより、テーマコミュニティに近いものとなっている。そのことを踏まえると、コーディネーターも「地域」に限定する必要はないのではないか。

(耳塚委員)

- 学校施設の改築は、生徒が「大切にされている」という感覚を持つことにつながる点からも大切である。
- 適正規模の記述は、生徒数の減少に対する数合わせではなく、生徒の学びの機会の確保の視点から検討されており、政治的な選択の余地を極限まで小さくすることに成功していて良いと思う。

(山田委員)

- 答申案 11 ページの「(3) 学校施設」に関する記述は、他の項目と比べてやや具体的過ぎるので違和感がある。

(貝ノ瀬委員)

- 施設の老朽化を、これからの学びの姿を見据えた学校施設へと転換する「好機」と捉えている点は良いと思う。

(川北委員)

- 答申が未来や可能性を感じるものになると良い。栃木県の「未来共創型専門高校」のようなネーミングも参考になるのではないか。

(井上委員)

- 高校再編については、他県の事例も参考にすべきである。国の動向も注視し、国の予算も活用して校舎改築等に取り組んでほしい。

(黒田委員)

○ 「おわりに」で、「教職員が意欲を持って持続的に働くことができる」環境に言及できたのは大きい。生徒と向き合う時間の確保は大事な視点である。

○ 答申に書くには至らなかったが、通学環境については、公共交通機関の維持確保などの取組も大事である。

(江森委員)

○ 「生徒ファースト」という言葉は、昨今の「〇〇ファースト」の使われ方から、ポピュリズムや排除のイメージで捉えられないか懸念がある。

(貝ノ瀬委員)

○ 答申案4ページの県の計画等に関する記述について、計画を「示している」だけでなく、現場が「取り組んでいる」というニュアンスにしたほうが良いのではないか。

(了)